

湿害には弱く、植え溝の中に水がたまって枯れ、地上部も生気を失ってしまいます。植え溝の水はけに注意し、強雨の後などは、すぐ畑を見回って排水対策をすることが大切です。

根菜類に限らず、野菜にとって根が健全に伸びていることは基本的な条件です。しかし、根は地中に伸びているので、生育中にはほとんど観察しないことが多いのではないのでしょうか。

地上部の生育が思わしくないときは、移植ゴテなどで遠くから株元へと土を掘り進めて、根がどの付近まで伸び出しているのか、そして白くてきれいな細根のたくさんついた根であるかどうかを調べてみる必要があります。

生育が極めて不良なら、根を切らないよう土をたくさんつけてシャベルなどで1〜2株、株ごと掘り起こして調べてみましょう。そうすれば、土の乾湿状態や、堆肥や肥料との根のからみ具合、病原菌の加害、ネマトダ（センチュウ）の寄生の有無など大変よく分かってきます（50頁第9図）。このことは次年度の改善策に大きく生かされてくることでしょう。

..... 今月の菜園作業 9月

ハクサイの植え付けと肥料の施し方

8月中下旬ごろタネまきし、育苗してきたハクサイは、9月に入り本葉4〜5枚になったころ、本畑に植え付けます。

短い秋の適温（18〜20℃）のもとで、葉を大きく育て、数多くの葉数（70〜100枚）を確保し、よくしまった玉にするのがハクサイ作りのポイントです。それには上手に施肥することが欠かせません。

元肥には、例えば1㎡当たり完熟堆肥4〜5握り、油かす大さじ4〜5杯、化成肥料大さじ2杯を畝全面にばらまき、20cmほどの深さによく耕し込み、土壌の乾湿に応じて10〜20cmの高さに畝をつくり、苗を植え付けます。栽植密度は早生種は60×45cm、中〜晩生種は70×50cmぐらいを標準とします。

追肥は通常3回を目安とします。第1回は苗が活着してどんどん伸び始めるころ（植え付け後約半月）、株の周りに1株当たり化成肥料を大さじ2杯ぐらいばらまき、軽く土に混ぜ

込みます。第2回はその15〜20日後、適温のもとで旺盛に育ち始めるころ、畝の片側に帯状に軽く溝を切って、1株当たり化成肥料と油かすを各大さじ3〜4杯与え、くわで土をやりわげながら畝に土寄せします。施肥する場所は、白い根の先が少し現れるぐらいの位置が最適です。第3回は、さらに15〜20日後、株の中の方の葉が立ち始め、結球態勢に入るところ、前回と反対側に化成肥料大さじ3〜4杯を与え、軽く土寄せします。葉に身体やくわなどが触れるとパリッと折れ、傷口から病原菌が入る恐れがあるので、丁寧に気遣いながら作業を進めることが大切です。

結球し始めるころ、畑全面がハクサイの葉で覆われ、地面が見えなくなるぐらいに育てられれば立派なできばえといえましょう。

肥料の種類や施用量は慣行法、畑の肥瘦により調整してください。

